

自由民主党 中央政治大学院
まなびとスコラ・オープン講座
憲法に学ぶ「この国のかたち」

第2期「まなびと夜間塾」第11回講座

2021年6月10日

講師：北原 健児 元読売新聞政治部長
テーマ：「佐藤・田中総裁時代」

どうも、はじめまして。只今ご紹介にあずかりました北原でございます。

中谷先生から佐藤時代・田中時代のご紹介があって、もうそれに話は尽きた。おあとがよろしいようで（笑）。私はこれにて退散してもいいのですが、折角の機会を与えていただきましたので、私なりにお話をさせていただきます。

実は私、自民党でこういう講演の機会を与えていただいたのは今日で2回目であります。今を去ること30年前、ここにリバティクラブがありました。そこでいろいろ外部の人間を呼んで自民党に多少痛い話をさせようと、こういう企画がありまして、私は読売新聞の政治部長時代にそこへお招きいただきました。

当時、自民党は党改革、それから選挙制度の改革、この論議の真っ最中でありまして、私は、そういうご時世を背景に自民党は、このままではダメだ、もっと自己改革をして世間様から自民党よくやったぞと言われるような目に見える改革をやった方がいい。やらないと自民党の将来・未来はありませんよ。こういう話をしたのです。何人か現役の先生がおられて、「自民党の将来はありませんよ」というところにインパクトを受けられ、その後、小沢一郎先生と一緒に自民党を脱党された先生方が、私の講演を聞いた先生の中から数人出ました。

その後、その先生は自民党に戻られて、「お前のとんでもない講演を聴いて、俺の人生、ずいぶん回り道をしたよ。どうしてくれるのだ」と、お叱りを受けました。寛容な先生で、ご勘弁いただいたのですが。その先生の名前は特に秘しますが、その後、大臣をやられ、参議院の幹事長をやられ、今は鬼籍に入っておられます。中谷先生もよくご存じの先生です。

それはさて置きまして、今日は佐藤時代と田中時代を話せということで、駆け足でございますが、お話をさせていただきます。この時代は、中谷先生もお話しになったような、自民党にとっては、戦後の復興を成し遂げ、西ドイツを抜いて世界第2位の経済大国になり、国民からの支持もそこそこあり、自民党の人材も多士済々の時代で、今から思うと、司馬遼太郎的に言えば、坂の上の向こうに雲があるぞと、その坂をどんどん登っていく、そういういい時代だったのですね。その中に佐藤さんと田中さんというご立派な総裁お2人がおられるわけです。

私の個人的なお話をしますと、佐藤時代、私は官邸の1年生記者です。仰ぎ見るような存在ですよ。今の政治家に佐藤さんに匹敵するような政治家を見つけることは非常に難しいと思うのですが、お祖父さんと孫ですよ。何を聞いても相手はそそり立っている。そういう時代です。田中先生の時には、それなりに時間が経っておりましたから、私も政治記者とし

て円熟とは言いませんが、それなりの経験と取材力を持った、そういう時代です。このお2人の業績を含めて、佐藤政治・田中政治の全部を私が語るという能力はありませんが、私の見たままの、この2人の政治と印象行跡を、お話しさせていただきたい。

佐藤さんは「待ちの政治」とよく言われます。あるいは「早耳の佐藤」「人事の佐藤」。「早耳の佐藤」とは、永田町で一寸の針が落ちても次の日には佐藤さんの耳に入っている。そういう非常に恐れられた存在だったですね。

「待ちの政治」とは、私なりに佐藤さんに聞いたことあるのですよ。若気の至りで怖いもの知らずですが、佐藤さんも、自分の孫みたいな記者が変な質問をするなという意識を恐らくお持ちだったのでしょう、そこは非常に寛容な、優しい、基本的には情の人ですから。政治家からは恐がられていましたけどね。

「きみ、啐啄同機（さいたくどうき）という言葉を知っているか？」と。

ここにいらっしゃる方で、ご存じの方いるかと思いますが、禅の言葉ですね。要するに卵からヒナが孵（かえ）る時に、親鳥はじっと卵の動静に耳を澄ませている。そうするとヒナが中からトントン。ヒナが卵の中から合図したのを聞いて親鳥は、ヒナが出てきやすいように、外から自分のクチバンを突いて、ヒナが孵化して出てくる。それを禅の言葉で啐啄同機と言います。

「きみ、安岡正篤を知っているかね？」

佐藤さんおっしゃいました。浅学菲才の私はもちろん知りませんよ。

「誰ですか。そんな人、聞いたこともありませんね」

そうしたらまあ、教養がないなどは言いませんでしたが、佐藤さんは教えてくれました。楠田實秘書官という産経新聞から来ていた（佐藤首相の）秘書官がおりまして、

「きみ、楠田君に聞いてごらん」

私、行きましたよ、楠田さんのところに。

「いや、佐藤総理から、聞いても二度と言えないような難しい言葉を聞かされまして、親鳥とヒナ鳥が卵の外と中から突っつき合う、そういうあれだ……」

「啐啄同機というのだよ、それは。君、時間があったら安岡先生の本を読んでごらん」

読みましたよ。そうしたら出てきた。そういうことで佐藤政治は、外から見ると「待ちの政治」と言うけれども、佐藤さんなりに機会を見て、じっと機が熟するまで待つ。機が熟したら一気に行動へ移す。そういう精神だなと私なりに理解しましたが、その後、佐藤総理総裁の時代を書いた本には必ず出てきます。もし、ご存じない方はご自分で調べられたら、な

るほどなあ、ということが出てきます。ですから単なる「待ちの政治」ではありません。当時は中国問題とか大学問題とか非常に動いていましたから、そういう時代に佐藤さんは、田中さんみたいにパッパッと行動しませんから、我々を含めて必ずしも評判は良くなかったようですが、佐藤さんは佐藤さんのそういう固い信念を持って、政治をやっていたようですね。

私の個人的な佐藤総理との関わりを言いますと、ある日、我が紙ではなくて、毎日新聞の朝刊に、佐藤総理がルーマニアの（ニコラエ・）チャウシェスク大統領を呼んで、日中問題の打開についてチャウシェスクから話を聞くという記事が出ました。バカなデスクがいて、それを確かめろと言うわけです。1年生です私は。そんなこと確かめられる能力はない。ですから、僕が聞く人は佐藤さんしかいないのですね。普通は外務省の役人に聞く、外務大臣に聞く、いろいろな段階があるわけです。そういう手段がなかったものですから。ホテルオークラの理髪店に佐藤さんは行きますから、その日程をつかんで、待っていたのです。僕が柱の陰に待っていたら、佐藤さんが来て、

「きみ、異な所から出てくるな」

「いや、実はかくかくしかじかで毎日新聞に抜かれまして、確かめるのは総理しかいません、申し訳ないけれど」と言いました。そうしたら可哀相だと思ったのでしょうね。「どれ、どれ」と言って、その新聞を手にとって見ているわけです。

「おう、よく書けている」

こちらは、否定されることを望んでいるわけですからね。違うよと言えば、追いかける必要ないわけです。

「よく書けているねとおっしゃいますと、記事は大要正しいのでしょうか。それから佐藤総理はチャウシェスクを招いて、日中問題の打開についてチャウシェスクから意見をお聞きになる、こういうおつもりなのですか？」

「その通りだ」。

その通り書いて送りましたよ。それが佐藤総理と話をした最初ではありませんが。

2回目。科学技術庁で土砂災害の実験をやったことがあり、そばで見ていた読売新聞の記者が土砂に呑み込まれて死んだという事件がありました。当時、科学技術庁長官は平泉渉先生ですよ、福井県選出の。平泉さんの後任人事を佐藤さんがやるのかやらないのか、そのまま平泉さんの続投でいくのか、各社で取材合戦になったのです。そうしたら、ある日、今でも国会にあると思いますが、閣員便所という大臣にしか入れないトイレがあるのです。今で

もありますか？ 内閣（総理大臣室）の反対側にありまして新聞記者も、新聞記者の特権（？）で入れていたのです。僕が入って用を足していたら佐藤総理が入ってきたのですよ。これはいい機会だと思ってね。本当は失礼ですよ、そんなところで人事を聞くわけですから。

「佐藤総理、失礼を顧みずにお伺いしますが、平泉さんの人事は辞表を預かっておられるのですか。交代させるのでしょうか」

そうしたら、こうやるのですね（左胸を右手でポンポンと叩く）。よく分からない。新米の記者だから読み解けるわけがないのですよ。

「僕なりに2〜3質問していいですか」と聞いたら、

「おう。僕もしかし、忙しいのだよな。すぐ行かないとならない」

「じゃ手短かにあれます。平泉さんは交代されるのですね？」

「ポンポンと」（左胸を右手で叩く）

「分かりました。交代されるのですね。後任は誰ですか」

参議院の木内四郎さんという人がなったのですが、5〜6人の浮かんでいた名前を僕は言ったのです。そうしたら、木内と言った途端に佐藤さんがちょっと難しい顔をされたのですね。僕が新聞記者のドタ勘で「後任は木内さんでしょう」と言うと、佐藤総理が、

「なぜ、君、知っているのかね」

それはそうですよ。「人事の佐藤さん」って口が重いので有名なのですから。

（「カマかけられちゃった」の声あり）

ええ。そんな新人記者の手に乗るといえるのは考えられないわけですね。佐藤さんがびっくりしちゃった。

「どうして、君、知っているのだ」

「いや、総理の顔がちょっと曇ったものですから。ドタ勘ですよ」

「君、いい勘しているな」と。

「ではこれ、帰ったらデスクに報告して、読売新聞の夕刊に載ると思いますよ。お許しをいただけますか」

「許すわけにはいかん。しかし、君とは臭い仲になったな」（爆笑）

トイレで聞いたもの話ですからね。そういう人なのです、佐藤さんというのは。世評と違う。非常に情に厚い人で、温かい人だなと。いまだに僕はそういう印象です。ですから佐藤政治は、我々の仲間では必ずしも評価は高くないですよ。「淡島に特ダネなし」と言って、佐藤さんの住んでいる世田谷区淡島の私宅へ行っても特ダネはない。ベテラン、古手の記者

にも漏らさない話を、新人の北原ごときに佐藤さんが言うわけもない。僕は佐藤さんからトイレの中で話を聞いて、デスクへ報告に行きましたよ。

「平泉さん更迭です。後任は参議院議員の木内さんだと思います」

「えーっ、君な、君ごときに佐藤がそんな話をするはずがないじゃないか」

と冷笑に伏して全然取り上げない。夕刊に載せようとしめないから、

「これを載せなかったら、読売新聞のひょっとしたら…」

要するに、他社に出て読売新聞にだけ出ないのを「特オチ」というのですが

「特オチになるかもしれませんよ。あなたは私の報告を取り上げなかったデスクの責任を問われることになりますよ」

と言ったら、しどろしどろ先輩記者をもう一度、佐藤総理のところへ聞きに行かせて、

「来たばかりの新人記者が大それたことを口走っている。あなたは本当に洩らしたのか」

そうしたら佐藤さん、さすが情の人ですよ。ノーと言ったら僕が困ると思ったのでしょね、「うん、うん、うん」と3回うなずいたと。それでベテラン記者もやっと北原が言っていることを信用する気になって、夕刊に書きましたね。読売新聞の特ダネだったですよ。何年何月だったか忘れましたが。

それから、佐藤さんという人はよく泣くのですよ。情にもろい人ですね。僕がいちばん最初にお会いしたのは、話が脱線ばかりしていますけど、新人記者として岩手県におりましたら、佐藤さんが遊説で来たのです。ちょうどその頃、岩手県の石川啄木の出た渋民村、そこを合併して大きくなった玉山村という、これは山の中です、要するに家が貧しい故に弁当を持って来られない生徒がいる。昼休み時間になって皆が弁当を食べていると、その子供たちはそっと教室を抜け出して、弁当を食べている級友を見ながら水飲み場に行って水を飲んでいる。可哀相じゃないかと、これも毎日新聞です、毎日新聞に出ました。

そして佐藤さんがやって来ました。毎日新聞は自分のところの特ダネですから、佐藤さんにぶつけた。佐藤首相がいきなりハンカチを出して、「うっ」と、嗚咽するのですよ。僕は、よその新聞の記事ですし、まあ政治家というのはずいぶん演技が上手だなとあきれて見ていました。その1年ぐらい前に池田勇人総理が来ました。当時岩手県は三陸縦貫鉄道、今も走っていますが、三陸リヤス線（三陸鉄道）です。要するに国鉄がつくって、県北と県南をつなぐ。沿岸に鉄道は走っていませんでした。それが県民の悲願だったのですね。その質問をしたところ、当時の池田首相は、その質問した記者を叱りつけて、「だから君、田舎記者はダメなのだ。こんなところに鉄道なんかつくったって、何の得もないだろう。建設費がか

かるだけで、乗客がないじゃないか。おかしいこと聞くなあ、岩手県は…」と。

その記者は、地元紙の岩手日報の記者ですけど、カンカンに怒っていました。その1年後に佐藤さんも来て。そのころ僕はまだ佐藤さんの全人格的なイメージがなかったですから、池田さんと比べて同じ吉田学校の兄弟弟子でも佐藤さんはずいぶん違うなと思って、しかし佐藤さんの演技だと思っていた。それで官邸記者になって、佐藤さんに聞いたのです。

「1年ぐらい前に、総理、玉山村の学童の昼食の問題で質問が出たら、ハンカチを取り出して、我々から見たら何かを拭っている印象を受けましたが、あの涙は本気ですか」

失礼ですね、今から思うと…。そんなバカな記者を許容している佐藤さんというのは大したものですよ。

「いや、僕も山口県で…」

佐藤家のご先祖は堂々たる山口の萩藩（長州藩）の、兵法指南ですかね、吉田松陰にも教えたという、要するに藩のお偉いさんですよ。そういう家で、まさか弁当を持たずに登校したという経験はないと思いますが、

「僕の県も貧しい県で、そういう僻地があるのだ。そういう話を聞いたので、思わず身につまされてあれしたけれども、演技ではないよ」

と、笑っていましたがけれどもね、変なこと聞くなあと……。ちょっと脱線しましたが、私の佐藤さんの大雑把な印象は、そういう印象です。

くどくど話していますが、佐藤さんの功績は、「沖縄返還」と「非核三原則」ですよ。当時はアメリカに占領されていたわけですから。施政権は日本にありません。我々が沖縄へ行く時はパスポートをあれして入国審査を経て行ったのですからね。そういう沖縄、しかも当時はベトナム戦争ですよ。防衛庁長官経験者、大臣経験者、ここにお2人いられるけど、ベトナム戦争で、最初は米軍優勢だった。しかし、だんだんベトナムに押されて米軍はほうほうの体（てい）で逃げ出したわけですよ。そのベトナム戦争の最中ですよ。中谷先生から、この間、核はあったのかどうかというご質問がありましたが、これはそのまま中谷先生にお返しするのが正しいですね。私ごときが、核はあったかどうかなど…。ベトナム戦争の真っ最中です。当時外務大臣は椎名悦三郎さんだった。後で椎名さんの話もしようと思いますが、椎名さん、名言を吐いていましたよ。

「君、沖縄から出た船は日本にも入ってくるのだぞ。何か積んだやつを海の中に捨てて来るのかい？ 置いて横須賀に来るのかい？」

それは椎名さんの最大のサービスですね。説明責任から沖縄に核があるよと言っているわ

けで、その当時、核はあり、ベトナム戦争の真っ最中。

それで、佐藤さんがいちばん最初に話したのは（リンドン・）ジョンソン（米国第 36 代大統領）ですよ。4 年がかりぐらいで、ジョンソンから（リチャード・）ニクソン（米国第 37 代大統領）、ニクソンの時に初めて「沖縄返還協定に合意」したわけですが、最初に話したジョンソン、まさにベトナム戦争が勃発した、アメリカの介入した直後です。そのアメリカに対して「核抜き本土並み」と言ったのですからね。沖縄が還るまで戦後ではない。沖縄返還を実現して初めて日本の戦後は終わる…。そのとき日中問題は浮上していなかったですから。沖縄返還に非核三原則をもって核抜きの返還を実現するのだと。

今から思うと当然視しているような状況もあるかもしれませんが、それはもう大変な政治的な賭けですよ。戦争やって敗けた相手に沖縄を還せ、しかも核付きはダメだよと、そういう話ですから。佐藤さんにしてみれば政治生命を懸けるぐらいの決意でおっしゃったのでしょね。それが実現した。正式に合意したのは 1970 年ですかね、ニクソン政権になってからですけども、最大の佐藤さんの功績は沖縄の返還と非核三原則。

それから、中谷先生もちょっとお触れになりましたが、日韓基本条約（1965 年）です。この時は椎名外務大臣で、私は外務省を担当していました。「まあ佐藤の野郎がうるさいのだよ」と椎名さんはぼやいていましたけれどもね。朴正熙（パク・チョンヒ 大韓民国大統領）と、韓国の外務大臣は李東元（イ・ドンウォン 大韓民国外務部長官）という人ですが、（この 2 人と）「俺はやろうとするのだけど、佐藤が俺に任せない。事あるごとに、どういう格好ですのか、韓国に対する援助はどうなるのだ、朴は OK しているのか、そういうことを根掘り葉掘り」。それは佐藤さんが総理大臣としての、椎名さんに対する叱咤激励と使命感でしょうね。それが日韓基本条約。沖縄返還とか大学問題とかいろいろありましたが、ノーベル平和賞の授賞理由は沖縄返還ですからね。

当時、ノーベル平和賞をもらったのは、（アルベルト・）シュバイツァー博士、アメリカの（トーマス・）ウィルソン大統領（第 28 代）、キッシンジャー大統領補佐官、西ドイツ（ドイツ連邦共和国第 4 代首相）のヴィリー・ブラント、東西（ドイツ）の和平、ソ連との東方外交を構築したと。そうそうたる顔ぶれで数少ないですからね、ノーベル平和賞は。その後、金大中（キム・デジュン／大韓民国第 15 代大統領）も貰いましたね。（バラク・）オバマ（米国第 44 代大統領）も貰いましたね。核廃絶するって演説だけでしょ？ そう言っっては、私ごときがアメリカの大統領様にイチャモンつけるのは、いささか僭越かもしれませんが、演説ただけですよ、ベルリンの壁の所で。佐藤さんは堂々たる実績があるわけで、

燦然と輝く佐藤さんの金字塔だと僕は思いますけどね。

(「あと 15 分で田中さんを……」の声あり)

わかりました。後でご質問があれば私の知る限りお話しますが、1 点。佐藤総理は恵まれています。池田総理の指名で佐藤さんになったわけですね。その党内調整をやったのが川島正次郎さんと三木武夫さん。三木武夫さんは後年、佐藤さんと袂を分かつような関係になったのですが、安西家を通じてつながって、遠い親戚ですよ。三木さんって意外にあれで、自民党からは党内非主流に見られているけど、三木さんとしては、自分は正統な自民党の保守本流ではないけれども、ちゃんとしたメインストリームを歩んだという自負があったのでしょうね。そういうことで佐藤さんになりました。最大のライバル河野一郎さんはすぐに亡くなりました。大野伴睦さんもすでに亡くなられた。ということで、佐藤嫌いの政敵がいないのですね。いたのは川島正次郎さん、保利茂さん、椎名悦三郎さん、愛知揆一さん、それから田中角榮さんと福田赳夫さんですよ。両方いるのですから。はっきり言って党内敵なしです。ですから啐啄同機でね、じっくり待って、機が熟したらやると、そういう政治的な基盤があったのですね。また、佐藤政治が可能だったのですね。それで沖縄返還、日韓基本条約、その他、大学問題の処理とか、公害の対策とか。

しかし残念だったのは(佐藤首相後継をめぐる)角福調整ができなかったことでしょうね。これはいろいろな人がいろいろなことを書いていますけれども、真相は田中さんが上手に逃げ回っていて、佐藤さんに「おい、次は福田だよ。君、我慢しろよ」と言わせなかったのですね。佐藤さんも、その力があつたとき、実際に沖縄返還はもう、辞める 1 年ぐらい前に道筋は見えていたわけですから、本格的に角福調整をやれば、福田さん、田中さんの順番で、自民党にとってはその方がハッピーだったのではないのでしょうか。その後の党内抗争の成り行きを見ていると。佐藤さんについては以上です。

田中さん。もう皆さんご存じですね。田中さんについて書かれた本はいっぱいありますよ。私の印象が強いのは、やはり日中国交正常化ですね。極端に言えば、田中政治は 10 年続くと見られていましたが、政権発足後 2 か月で成し遂げた日中国交正常化をもって田中政治は終わり。後の田中政治はちょっと期待外れですね。お前の言っていることは違うぞというご指摘を後でいただいても結構ですが、大したものですよ、田中さんの日中(国交正常化)は。とにかく自民党内が真っ二つに割れている。そういう中で公明党の竹入義勝さんが周恩来から田中さんが中国にお見えになったら中国も中日正常化をやる決意だという話を聞いて、田中さんに周恩来はこういう意向ですと伝えたのですね。そうしたら田中さんが竹

入さんに言ったそうですよ。

「竹入君、きみ、日本人だな。」

竹入さんも、

「そうですよ。日本国のために私は良かれと思って周恩来のメッセージを持ってきたのです。」

「わかった」。この二人のやりとりの中で、田中さんのハラは決まったと思いますよ。

このころは国交正常化前ですから、まだ大使館がありませんので、人民日報の記者が北原ごときに「今晚お会いしたい」と、中華料理をご馳走になった。おいしい中華料理でしたよ、食べたことのないような。

「田中さん、大丈夫ですか」というのですね。

「福田は？」というのです。

田中さん。福田。失礼じゃないかと。日本の総裁は2人のどっちかです。我々日本人に対して、「田中さん」はいいです、「福田は？」という質問の仕方は、私は受けつけられない。そうしたら何かぐちゃぐちゃ言っていました、要するに、あなたは田中さんが勝つと思うか、福田さんが勝つと思うかと。僕は、正確な票読みはできませんが、田中さんが勝つと思います。そうしたら喜んで、メモしていましたが、「あなたのお話は周恩来総理にお伝えします」と。「ウソおっしゃいと言うの」。周恩来さんが私の話なんかを聞くわけがないじゃないですか。

大したものですよ、2か月で決断して。竹入さんのあれもあったにせよ。あるいは古井喜実さんとか小坂善太郎さんとか、中国を往来された自民党のOBの先生も沢山おられますが、それらを聞いて決断し、田中さんは中国へ行った。

どういうやりとりがあったかは物の本にたくさん書いてありますが、2つだけ申し上げると、周恩来（総理大臣）と田中さんの第1回首脳会談がありまして、夜、晩餐会が開かれたのです。田中さんが挨拶して、

「日中関係は大変不幸な時代がありまして、中国人民に対して、ご迷惑をおかけしました。

日本としては痛切に反省しております」

そのまま訳せばよかったのだけれど、「ティエンラ・マーファン（添了麻煩）」と訳したのですよ。中国語のできる方もいらっしゃると思いますが、ティエンラ・マーファンは、「ご迷惑をかけたね」という。「打ち水していたら道路を歩いている女性のスカートに水がかかった、ごめんね」と、その程度の軽い言葉だったのです。そういう通訳をした。田中さんが

偉いのは、通訳を左遷したりしなかったことですよ。そう言ったものだから周恩来が怒ってしまっ。その謝り方は、なんだ！ ガチーンとやったのです。

田中さん以下、大平正芳外務大臣、二階堂進官房長官、外務省橋本恕アジア局中国課長、高島益郎条約局長、丹波實さん（条約課事務官）、その後ロシア大使をやりました。周恩来にガチーンとやられて、その晩は、お通夜のような雰囲気だったそうです。ただ、田中さんだけは元気そのもの、1 升びんを提げて現れて、中国ですから1 升びんじゃないでしょうね、茅台酒（まおたいしゅ）なのかブランディなのか知りませんが、

「だから大学出はダメなのだ。なにをきみたち沈んでいるのだ。明日があるじゃないか。周恩来ごときに…」。

田中さんですよ、そこら辺に盗聴器が仕掛けてあると分かっているから、わざと壁に向けて言っているのですよ。

「周恩来ごときにガチーンとやられて、なにを君たちは沈み込んでいるのだ。嫌だったら帰りゃいいのだよ！」

聞こえるように言っているわけです。中国はこれを聞いていて。「ん？ 帰られちゃまずいな…」。それはそうですよ。中国は当時、もちろん日本とも国交ないですが、ソ連とも関係悪化していた。田中さんが行った時点では、その年の1月、キッシンジャー、ニクソンが行った。しかし、まだ米中国交正常化は妥結していなかった。そういう時期ですから、いち早く日本と話して仲良しになり経済復興をやりたいのです。そういう枠組を田中さんは分っている。壁に向かって、

「帰りゃいいのだよ！」

周恩来、びっくりしたでしょうね。私はその現場にいたわけじゃないですよ。現場にいた人の話。そういう状況で出来た。それが田中さんの、度肝を抜いた逸話です。

それから2回目。話が終わった後、毛沢東から「今晚、会いたい」と。毛沢東が会うというのは話がまとまるぞと、そういう前提ですから。まとまらない前提で会うことはありません。現場にいた人から聞いた話ですよ。田中さんが偉いのは、

「なに、毛沢東？ 俺だけはダメだ。大平君も二階堂君も一緒だ。3人一緒なら会うと言っておけ…」

中国側はあわてて、その3人になってしまった。それだけじゃない。田中さんが大芝居を打つのは！ 中南海に毛沢東の書斎兼住居があるのですよ。毛沢東ですから玄関までは出迎えません。部屋の中で待っていたら、田中さん着くなり「トイレへ行くぞ」と、毛沢東を

待たせたまま、トイレへ行っちゃいました。何分間行ったか知りませんが、それも田中さんですよ。考えた上でそういう手を打つわけです。さっき言ったような「帰りゃいい」とか。

それから3回目。話が全部まとまって上海に行ったのですね。御一行様と、周恩来首相が接待役で一緒に行ったのです。田中さんと一緒に座って周恩来がいろいろ話しかける。が、田中さんはグーグー高いびきですね、30分間。アラビア石油の社長をやった小長啓一秘書官がそばにいて、これは小長さんから聞いた話ですから本当だと思いますけれど、周恩来が呆れ返って、「大人物だねえ。中国では、こういう人のことを豪傑と言うのだ」と。

しかし、日中（国交正常化）は正しい決断だったと私は思いますが、最近の中国の現状を見た時に、良かったのか？ 3兆6500億円の有償無償のODA（政府開発援助）を供与しています。やめたのはいつだと思いますか？ 何と最近ですよ。2018年。安倍内閣の時に初めて中国に対するODAをやめた。

大平さんは非常に心優しい人ですから、戦争中、興亜院の（連絡部か）何かに中国で勤務していたことがあるのでしょ、中国人民に大変な迷惑をかけた。それに対して中国は賠償を請求しなかった。そんなの当たり前ですよ。台湾との間に「日華基本条約」があつて（1940年11月30日、大日本帝国と中華民国・汪兆銘政権との間で調印）、台湾は賠償を放棄しているわけです。蒋介石が「怨みに報いるのに徳を以てす」と、日本人将兵を送り帰した。蒋介石の大英断があつて中華民国は賠償を請求しなかった。そういう経緯があるから国際法の原則で中国は賠償請求をしないのが当然、賠償されても日本は断わる。そういう関係ですよ。

しかし大平さんは、ある種の中国に対する思いがあつたのでしょね。大平さんの決断で道を開かれ、3兆6500億円のODA供与がなされた。しかし今、中国の現状を見ると、（日中国交正常化）、日中平和友好条約の時（園田直外務大臣署名）に、そこまで詰めて話を進めておくというのは難しかったと思いますけれど、どうだったのだろうかと。

ある時、僕は外務省を担当したら、外務省の高官から電話がありましたよ。

「北原君、君に折り入って頼みがあるのだけれども、中国に対するODAを見ていると、ひどいものだよ。インフラ整備とか生産設備の協力とかこれはいいよ。だけど中国は軍事費に使っているよ。君、日本の国益のために書いてくれないか。ぜひODAの実態を日本国民に知ってもらいたい」

田中さんと一緒に行った、外務省の偉い人ですよ。そのとき僕はお国のためだとの信念で書きましたよ。1面のトップではありませんでしたけど。そうしたら次の日に大平総理が、

その外務省高官に電話してきたそうです。

「あれを書いたのは読売新聞の何という記者だ。とんでもないことを書いている。君は外務省の責任者として、二度とああいう記事を書かせないようにしろ」

その外務省高官から、私に電話がありました。

「君にそっと教えておくから。大平もカンカンになっているから、しばらくそっとしておけ」。当時の官僚にはそういう骨のある人物もたくさんいました。

そうしたら読売新聞の編集局長のところに中国大使館から電話があったそうです。

「読売新聞と中国は非常に仲のいい、よく理解し合ったはずなのに、変な記者がいるね」と、中国大使かどうか知りませんが、嫌味を言われたそうです。

もう1点、周恩来の時に田中さんは言わなくてもいいのに、口にした。

「尖閣問題というのがありまして……」

周恩来も大したものです。

「それを言ったら日中(国交正常化)まとまりません。それはなかったことにしましょう」。

田中さんは、ちょっとそそっかしいところがあって、嫌だったら帰りゃいいのだと、そういう度胸のよさの反面、うかつに尖閣の話をお口走ってしまった。中国にしてみればその後の鄧小平の「後世に知恵を出し合おうじゃないか」という発言で、中国はこっちの領土なのに、日本が交渉に来た、あるいは微妙なところだからまあ黙っていてやろう、そういう意識なのでですね。今は野放図に動き回っている。

ですから、その時に田中さんがピシヤリとやり込めておけば、理想論ですけど、どうだったろうか。それから大平さんが、賠償と引き換えに妙なシンパシーを持たずにODAの使い方について中国政府にきちんと話をして、おかしい使い方をしているという事実関係をつかんだ時に中国政府に厳しく物申していたらどうだったろうか、というのが私の大雑把な論証ですけれども、いいですか？ では、この辺で……。

(この回おわり)